

『唯我独尊な男 上』

著:あすか

ill:タカツキノボル

「恭夜さん、今日アメリカからすごい人が科警研に来るって知ってました？」

隣の席に座る同僚の三(み)上(かみ)が言った。三上は恭夜より背が低く、くるくるっとよく動く目が可愛い。三上は新人でもないのに、白衣にもどこか着られている印象があって、恭夜はいつもついからかってしまう。とはいえ、恭夜自身もそれほど白衣が似合っているとは言い難い。

「……そうなのか？」

背(せ)凭(もた)れに思いきり身体を伸ばし、恭夜は三上の方を向く。

「えっと……犯罪行動科学部の方らしいですよ。あとで覗(のぞ)きに行きませんか？」

興味津々という顔で三上は身を乗り出した。

「あんまり興味ないな……。どうせジジイじゃねえの？ 可愛い子猫ちゃんみたいな男だったらそそられるけど」

と、言ったものの、今のところどれほど好みの男が目の前に現われたところでその気にはなれない。単に好みの話だった。

「恭夜さんって、子猫ちゃんみたいな男の人がいいんですか？」

恭夜がゲイであることを知っている三上は苦笑していた。

「ああ、子猫ちゃんがいいな。気まぐれだけど甘えん坊だとさらに好み」

恭夜はゲイだ。

小さな頃から不思議と男にしか恋愛感情を持てなかった。それが原因で両親と揉(も)め、アメリカに単身渡った。日本に戻ってからも、自分の性癖を隠すことはない。公務員である限りゲイが理由で辞めさせられることはないからだ。

自分の性癖をさらけ出したことで、離れてしまうような友達は、恭夜のほうも付き合い合う気などなかった。

自分を偽ることが恭夜は嫌なのだ。

三上に対しても、自分は男と付き合いっていたとはっきり話してあった。どういう反応を見せるかと告白したときは心配したが、意外にすんなり受け入れてくれた。

そんな三上に恭夜も感謝している。

「ついでに言うと、可愛くて小悪魔タイプがいい。ジジイは問題外」

恭夜は作業を続けるために白衣の袖(そで)をまくり、モニターに目を向けた。

「あはは。でも、そういう相手って、振り回されちゃいますよ」

三上は楽しそうに笑った。

こうやってみると三上も可愛いタイプなのだが、毒気がないのだ。

変な好みだと恭夜も自覚している。いつも自分よりも背が小さくて、目が大きく顔が小作りで、それでいてちょっと気まぐれな小悪魔タイプの男に弱い。

「振り回されているようでいて、実は俺が広い心で受け止めてるって感じかな。俺がいてやらなきゃ駄目だよな～こ～いつう～……なんて思えるところがいい」

だが、恭夜は昔からそういう男に惚れ込んで、振られてきた。

そのたびに、次からこういうタイプはやめよう——と心底思うのだが、結局恭夜がアタックする相手は、決まって小悪魔タイプだった。

こればかりは好みだから仕方がない。

「恭夜さんって面白すぎます～。あ、でも、犯罪行動科学部に来られる方って、ジジイじゃありませんよ。いえ、そういう意味で恭夜さんに話したわけじゃなくて、もともと恭夜さんはニューヨーク市警にいたんでしょ？ その人って以前FBIのアカデミーで有名だった現役交渉人らしいから、名前くらいはご存じの方かと思ったんですけど」

三上の言葉に恭夜は一瞬、身体が硬直した。

FBIのネゴシエーター？

「……ま、ままま、まさかそいつ、名前……ジャック・ライアンとか聞かなかったか？」

慌てて恭夜が三上の方を振り向くと、同時に部屋の入り口も視界に入る。

信じられないことだが、入り口にはジャックが立っていた。

肩より長い金糸のような金髪をサラサラとなびかせ、薄水色の目は恭夜を見つけると、嬉しそうに輝いた。

白人独特の白い肌に、輝く金髪、薄水色のガラス細工のような瞳は長い睫(まつげ)で縁どられている。眉は意志の強そうな形をしていた。鼻筋はすっきりと通っていて、まっすぐ。唇は厚みはないが、うっすらと色づいているのに女性のように全く見えなかった。

オーダーメイドの紫がかかった紺色のスーツはジャックのスレンダーな身体を際立たせ、長い脚をさらに長く見せる。髪を撫で上げる、手を組むといった一つ一つの仕草が上品で優雅だ。

もちろん、ライアン家という由緒正しい血筋から培われている育ちのよさも、ジャックが纏うスマートな雰囲気を作り出しているのだろう。

一度見たら忘れられない強烈な美貌。

道行く人はジャックとすれ違うと必ず振り返る。

だがこの男、上品であるはずの口元がいったん開くと、どんな相手であっても『言葉』という武器で組み伏せる。それを恭夜は骨の髄まで知っていた。

「ぎゃ——っ！ 嘘だっ！」

驚きで椅子から転げ落ちそうな恭夜に、ジャックは両手を広げて一目散に向かってくる。

「キョウ～！ マイハニ～！」

逃げようとする恭夜を捕まえてジャックは抱きついてきた。

「はなっ！ 離せっ！ くっそー！ なんてあんたが日本に来るんだっ！」

拘束された身体を必死にばたつかせて恭夜は叫ぶ。

「私がお前を手放すとも思っていたのか？ 上手く逃げたつもりだろうが、この地球に住んでいる限り、たとえアマゾンの奥地に逃げようと捕まえてやる」

と、英語でジャックは恭夜の耳元に囁(ささや)く。その触れる吐息すら、忘れていた疼(うず)きを恭夜に思い出させるものでしかない。

「俺はっ、お前とは金(こん)輪(りん)際(ざい)会(あ)わないとっ……」

押しのけようと振り上げた手を掴まれ、そのまま唇を奪われた。突然のことに恭夜の目は見開かれ、その視線の先に、茫然と佇(たたず)む三上の姿が映った。

ここは職場だぞっ！ と恭夜は抗議したかったが、ジャックがそんなことを気にする

わけがない。

世界はすべて自分の思いどおりになると、心底信じている男がジャックだ。恭夜が何を言ったところで話が通じたためしはない。

とはいうものの、ジャックのキスは何もかもが蕩(とろ)けるほど甘かった。

散々翻弄され、ようやく唇を解放されたときには、恭夜は息も絶え絶えになっていた。

「——はっ……あっ……あんた、一体……なんなんだよっ！ 何しに来たんだっ！」

恭夜が叫んでいるのに、ジャックは三上に自己紹介をしていた。

「わたーし、ジャック・ライアンいますねえ～。彼の恋人います～」

——ってお前、その妙な日本語は誰に習ったんだっ!!

「あ、はあ……僕……三上といいます」

上下に激しく握手されながら、突然の鬨(ちん)入(にゆう)者(しゃ)に半泣きの顔で、三上は目で恭夜に助けを求めていた。

「ジャック、も、いいから、離してやれよっ！」

三上を掴んでいる手を恭夜が剥がすと、ジャックはニヤと口元だけで笑った。

「キョウはすぐ嫉妬するんで一っすっ、ごめんなさいよ」

それはどういう日本語なんだっ！

誰に習ったんだっ！

「ごめん、三上、俺、ちょっとこいつと話つけてくるわ……」

恭夜は無理やりジャックを引っ張って廊下に連れ出した。だが廊下で誰かに会うのも困る恭夜は、二人きりは避けたかったが、仕方なしに小会議室へ向かった。

応接セットの置かれた小会議室に入ると、恭夜はソファに座ることなく壁に凭れかかった。ジャックとは距離を置きたかったのだ。

「どういうことなんだよ……」

やや乱れた焦げ茶色の髪を撫で上げて恭夜は言った。

「なんのことだ？」

ジャックは我が物顔でソファに座ると、くつろいだ様子で長い脚を組む。ただ座っているだけなのに、その姿はモデル顔負けだ。

「俺たちはもう終わっただろ。なのにどうして……」

「ただの里帰りに、私がいちいち口出しするとでも思ったか？」

ジャックは薄水色の目を細め、威嚇するような視線を送ってきた。

里帰りってなんだ？

俺の言うこと聞いているのか？

「もっとも、あまりにも帰ってこないの、私から出向いたまでだ。なんて理想的な素晴らしい恋人だろうね、私は」

恭夜が答えないのをいいことに、嬉しそうにジャックは続けた。

「……誰が恋人だっ！ 俺の恋人はあんたじゃないっ！ 頭おかしいんじゃないのか？」

恭夜の剣幕に、ジャックはジロリと睨(にら)みを利かせた。だがその姿も優美だ。

「優しい気持ちで、少し自由をあげたら、そんなふうには反抗することを覚えたのか？」

「俺は最初から自由だっ！ 何が優しい気持ちだよ。あんたは俺を従属させたいだけだろ。そんなもん、俺はごめんだ」

こちらからも睨み返し、どう出てくるか様子を窺(うかが)ったが、ジャックは何事もな

かったような表情で恭夜の鋭い視線を受け止めると、ニッコリと笑った。

「寂しかったんだね、キョウ……」

ジャックはそう言って立ち上がると、恭夜に向かって歩きだした。そんな彼に恭夜は怯えるようにじりじりと後ろに下がる。

「側に寄るなっ……！」

ジャックに触れられたくない。

ひとたび触れられると、反抗できなくなってしまう。

嫌だと言う口を唇で塞(ふさ)がれ、抵抗する身体は抱擁に搦(から)め捕(と)られ、降参する。

本文 p11～18 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>